

——学生との図書館懇談会（第2回）開く——

39年12月、第2回目の学生との図書館懇談会が行われた。学生側から8名（法学部4名、工学部3名、文学部1名）が出席した。

前回の懇談会のさいに、学生の要望として出され、改良された閲覧室の照明のその後の効果については、学生側から、いま一層あかるくする必要があるという意見と、良くなったという意見があった。

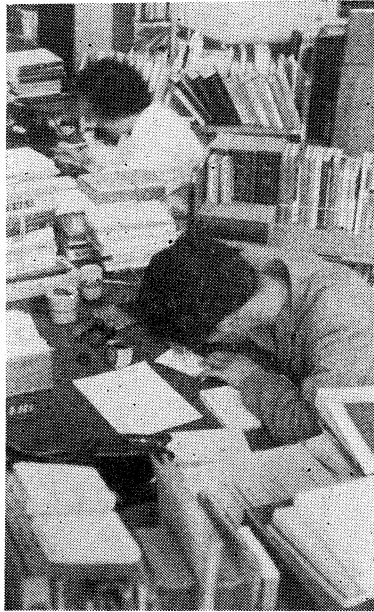
また読書については、図書館の方が落ち着いて読めるという者と、自宅や下宿の方が落ち着けるという意見が出されたらしいが、一般に図書館の行なっている各種サービスについての学生側の知識が十分でなく、この点で図書館側のPRの不足が痛感された。

—館内めぐり—

和漢書及び洋書目録掛

毎日収集蓄積されるぼう大な図書の中から利用者が必要とするものを、すばやく探し出すことは容易なことではない。図書館では、そのために、実物代りに利用者と本とを媒介するものとして目録（カタログ）を作っている。目録は、図書館の鍵であり、目録掛員は鍵の製作者なのである。京大図書館での鍵の作り方を紹介してみよう。

まず、本館独自の規則により、図書の基本的事項を記載する基本記入カードの作製がおこなわれる。本館では、和漢書の場合書名主記入方式を、洋書の場合は著者主記入方式を採っている。標題紙、奥付などによって、書名、著者名、出版地、出版者、発行年、頁数、背の高さ、図版の有無など、現物にふれなくても、その図書のイメージがわかるように記載する。さらに完全を期するため、共著者、訳者、編者等の副記入のたぐいも記入し、最後に所属する学部、教室名、受入年月日、受入番号を記載して、やっと1冊の図書の基本記入カードができ上る。



受入掛が図書の出生届をおこなうとすれば、これは子供の生いたちや、育ち方などを点検して母子手帳を作成するようなものといえよう。

この基本記入カードは、ゼロックスという機械で複製され、その図書の属する学部の図書室へ配達されるカードと、本館の全学総合目録に編成されるものとに仕分けされるのである。現在、本館の持つ目録には、前記の全学総合目録のほか、著者名目録、書名目録、分類目録がある。

以上にのべたのは、もちろん基本的な仕事だけであって、目録掛では、これらの仕事以外にも多くの労力と時間を必要とする仕事がある。たとえば、往々にして基本的事項のひとつつないしそのすべてが不明な図書がやってくるが、このような表紙も奥付も欠除した図

書などは、完全な身元や、生いたちを調査するのに、多くの時間を必要とする。時には、たった1冊の本のために掛全員のまる1日の労力が払われることさえある。

このように、利用者の皆さんが、的確に自分の必要とする図書を何十万冊かの中から探し出せるように、完全を期して努力を続けているのであるが、まだまだ本館の目録は利用者にとって至便なものとはなっていない。その理由のひとつは、分類表の不備である。本館の図書分類表は、明治30年の創立当時に作られたものを現在も使用しているため、その間、60余年の歳月を経ているため、いく度か部分的に改訂を加えたけれども、日進月歩の学問の進展に追いつかず、抜本的な改訂または新分類表を作る必要に迫られている。

昭和38年度1年間に受入れられた図書は7万冊以上である。その量は1冊の厚さ3糎とすると2,100米の長さになる。1日200冊以上を整理してやっと追いつける量である。(ただし、法、文、経の3学部図書は本館で整理しない。)各冊に平均5枚のカードを作るとすると、7万冊では35万枚となる。カード100枚で3糎とすると、35万枚では135米、1,000枚入りのカード箱が毎年350箱必要となる。

あらゆる国の図書、あらゆる分野の図書について一定の規則に従い目録を作る司書は、特殊な技術熟練が要求される。現在だけでなく将来にわたっても普遍妥当する目録は、一定の秩序を保ちつつ混乱を生ぜしめないことが必要である。はなやかな図書館活動の舞台裏でじみにカードを作り、目録を編成している目録掛があることを忘れないでほしい。

アジア研究米国書籍展開催

とき：2月9日(火)～12日(金)

毎日午前10時～午後5時

ところ：付属図書館陳列室

極東および東南アジア地域に関する、最新の学問的成果を示す米国図書約600点余の展示である。ますます国際的な注目を集めつつある地域に関する米国書籍展として期待されている。

あとがき

▶新年の増大号をお届けします。御覧のように、年頭にあたり「夢の図書館」を特集しました。学生諸君の「将来の図書館は、こうあって欲しいという単なるビジョン」にすぎないもの、として片付けてしまえばそれまでですが、われわれの持つ貧弱な図書館設備を考え合わせる時、なかなか面白い読み物となっております。

▶資料紹介、館内めぐりが各方面からわりあいに好評をいただき、創刊号の企画以来全力を傾けて編集にあたってきたわれわれの努力は、いささかなりとも報いられたと考えております。しかし、われわれは絶えず前進しなくては満足できません。その意味で読者諸賢よりきびしいご批判を寄せていただき、立派な館報にしていきたいと思っております。今後のご鞭達を切にお願いいたします。

(S・H)